

武蔵野日曜集会

信仰の奥義

――ヨハネ伝第6章16～40節――

1984年5月6日（武蔵野）

小池辰雄

湖の上を涉っていく「心安かれ、我なり、懼るな」ニヒツ・イスト・アッレス「汝は我なり」
天を仰ぎて彼自身を擘いた本願靈証者 キリストという神の本証体を信受せよ「我にきた
る者は我これを返けず」 霊的同化作用

【ヨハネ6・16～40】

16 夕になりて弟子たち海にくだり、17 船にのり海を渡りて、カペナウムに
往かんとす。既に暗くなりたるに、イエス未だ来りたまわず。18 大風ふきて
海ややに荒出づ。19 かくて四五十丁こぎ出でしに、イエスの海の上をあゆみ、
船に近づき給うを見て懼れたれば、20 イエス言いたもう「我なり、懼るな」
21 すなわちイエスを船に歡迎しに、船は直ちに往かんとする地に著けり。
22 明くる日、海のかなたに立てる群衆は、一艘のほか船なく、又イエスは
弟子たちと共に乗りましたまわず、弟子等のみ出でゆきしを見たり。23（時にテベ
リヤより数艘の船、主の謝して人々にパンを食せ給いし処の近くに来る）24 ここに
群衆はイエスも居給わず、弟子たちも居らぬを見てその船に乗り、イエスを
尋ねてカペナウムに往けり。25 遂に海の彼方にてイエスに遇いて言う「ラビ、
何時ここに来り給いしか」26 イエス答えて言い給う「まことに誠に汝らに告ぐ、
汝らが我を尋ぬるは、徴を見し故ならでパンを食いて飽きたる故なり。27 朽
つる糧のためならで永遠の生命にまで至る糧のために働け。これは人の子の
汝らに与えんと為るものなり、父なる神は印して彼を証し給いたるに因る」
28 ここに彼ら言う「われら神の業を行わんには何をなすべきか」29 イエス答え
て言いたもう「神の業はその遣し給える者を信する是れなり」30 彼ら言う「さ
らば我らが見て汝を信ぜんために、何の徴をなすか、何を行うか。31 我らの
先祖は荒野にてマナを食えり、録して「天よりパンを彼らに与えて食わしめ
たり」と云えるが如し」32 イエス言い給う「まことに誠に汝らに告ぐ、モー
セは天よりのパンを汝らに与えしにあらず、然れど我が父は天よりのパンを
与えたもう。33 神のパンは天より降りて生命を世に与うるものなり」34 彼等
いう「主よ、そのパンを常に与えよ」35 イエス言い給う「われは生命のパン



なり、我にきたる者は飢えず、我を信する者はいつまでも渴くことなからん。³⁶然れど汝らは我を見てなお信ぜず、我さきに之を告げたり。³⁷父の我に賜うものは皆われに來らん、我にきたる者は、我これを退けず。³⁸夫わが天より降りしは我が意をなさん為にあらず、我を遣し給いし者の御意をなさん為なり。³⁹我を遣し給いし者の御意は、すべて我に賜いし者を、我その一つをも失わずして終の日に甦えらする是なり。⁴⁰わが父の御意は、すべて子を見て信する者の永遠の生命を得る是なり。われ終の日にこれを甦えらすべし』

●湖の上を涉っていく

¹⁶夕になりて弟子たち海にくだり、¹⁷船にのり海を渡りて、これはもちろんガリラヤ湖です。

カペナウムに往かんとす。既に暗くなりたるに、イエス未だ來りたまわず。¹⁸大風ふきて海ややに荒出づ。¹⁹かくて四五十丁こぎ出でしに、イエスの海の上をあゆみ、船に近づき給うを見て懼れたれば、²⁰イエス言いたもう『我なり、懼るな』²¹すなわちイエスを船に歡迎しに、船は直ちに往かんとする地に著けり。

このヨハネ伝6章15節からの記事は、並行記事としてはマタイ伝14章22～33節、マルコ伝6章45～52節です。ルカ伝にはない。

その前に、このヨハネ伝と同じように他の福音書でも、あの五つのパンと二つの魚からキリストが大奇蹟を行って、五千人の者に食べさせた。そしてみんなもうお腹いっぱいである。なお余った残りが十二の籠に満ちたという驚くべきことが書いてある。これほどの奇蹟は東西古今にないですね。そのあとのことなんです。

マタイ伝14章22節に、

「²²イエス直ちに弟子たちを強いて舟に乘らせ、自ら群衆をかえす間に、彼方の岸に先に往かしむ。²³斯て群衆を去らしめてのち、

キリストはみんな追っ払ってしまった。

祈らんとて^{ひやか}竊に山に登り、夕になりて独りそこに給う。

マルコ伝も大体同じです。マルコ伝の方では、「かなたのベツサイダに先に往かしむ」と、特にベツサイダという地名が出ています。

²⁴舟ははや陸より数丁はなれ、風逆うによりて波に難されたり。」

ヨハネ伝では、「かくて四五十丁こぎ出でしに」と書いてある。マタイ伝の方は「数丁」と書いてある。「四五十丁」とは、ギリシア語では「三十三スタデオン」という字です。「一スタデオン」は185メートルです。三十三スタデオンとすると、⁵⁵⁵⁰メートルになる。約5キロ半。大体、ガリラヤ湖は梨のような恰好をしている。一番幅の拾い所が12キロメートルです。



だから、真ん中まで行かないくらいです。かなり沖に出たところ。風が逆らって、波に翻弄されて、進むも退くもできなくなつて、弟子たちが慌てふためいたわけです。キリストみたいな方は、やがて大時化^{しげ}になるくらいのことでは見えている。ところが、「強いて乗らせた」というんですから、なかなかキリストも意地がわるい。ということは、意地がわるいのではない。彼らの信仰を試すわけです。マルコ伝には「漕ぎわづらう」と書いてある。どうにもならん。もう極限状況になつてしまった。ヘタするとひっくり返る。

キリストは独りで山に登つて祈りこんだ。正に祈り入ったんです、神さまの中に。神の懷の中に祈り入った。キリストみたいな方は完全に神さまと一つになつた。中へ入つてしまつてゐる。祈りの秘訣は全くそうなんです。何時間ただ祈つたつてダメです、神の中に、キリストの中に自分を投げ入れることをしなかつたら。やってますか。そうしたらば、もう何か知らんけれども、本当の平安と力がくる。自分の精神状態がどうだ、今の運命がどうだ、環境がどうだ、なんてなことではない。そういう事態であればあるほど、逆にキリストの中に入る。「苦しい時の神頼み」ではなくて、神の中に入らなければダメです。ただ外側から頼んだつてダメなんです。一般の信仰というのは、円でいうと、しょっちゅう外にいる。せいぜい、外接だ。外接円ではダメだ、内接円にならなくては。内側に接する世界に入らなければダメなんです。自分がキリストの内接円となれということ。もう、そんなことは私は無教会時代には絶対に教わらなかつた。そういうことは何か神秘主義だと言つて退ける。「信仰」と言つて、仰いでばかりいる。一般に「信仰」と書くけれども、本当は「信交」、交わる世界に入らなくては。

キリストは完全に神の中に入つてしまうから、彼の物理的体重はどこかへ消えてしまつてゐるようなわけです。だから、湖の上を涉つていくんですよ。「波の上にどれくらい触れていたんですか」なんて、そんなことではない。水の上を渡つてきたなんていう人は他にいないものね。とにかく、キリストは大変なひとです。これが完全に祈りの世界です。

●「心安かれ、我なり、懼るな」

「舟に近づき給うを見て懼れたれば」

とある。このことは前に私の著作集第一巻『無者キリスト』のキリストの「伝道」のところに書いてありますから、読み返してください。「湖上のイエス(一)、(二)」の二つある。沈みそうな舟の中でキリストが舟板を枕に眠つていたというのと、それから今のようになつてきて彼らを助けてやったというのと二つ書いてある。変化^{へんげ}のものだと思つたわけですよ。マタイ伝にも詳しく書いてある。「夜明けの四時ごろ」というんだから、夜もすがらキリストは祈つていたんだ。だから、だいたい長いこと弟子たちは翻弄されていた。夕べから出掛けて行つたんだからね。何時間も湖の上を進むに進めず、退くに退けずというわけだ。マタイ伝14章25節から、



「²⁵夜明の四時ごろ、イエス海の上を歩みて、彼らに到り給いしに、²⁶弟子たち其の海の上を歩み給うを見て心さわぎ、変化^{へんげ}の者なりと言いて懼れ^{おそ}れ叫ぶ。

ヨハネ伝の方はえらく簡単に書いてある。「イエスの海の上をあゆみ、船に近づき給うを見て懼れ^{おそ}れたれば」と。「懼れて叫んだ」とマタイ伝、マルコ伝にも書いてある。

²⁷イエス直ちに彼らに語りて言いたもう『心安かれ、我なり、懼るな』（マタイ14・25～27）

「心安かれ」という言葉がマタイ伝にもマルコ伝にも出てます。要するに、

「心安かれ、我なり、懼るな」

は、この三つは同じこと。

「私だよ、こわがるな」

という言葉です。「私だよ」「エゴ・エイミ」という。「こわがるな」は、

「懼れなき世界に入れてやる」

ということ。

「私につかまれば、私の中に入れば、もうこわがる必要はないぞ」

と。こういう簡単な言葉が非常に信仰の世界で大事なんです。説明はいらない。「私だ」と。

「私だ」ということに気がついたらもう、「こわがるな」も要らないくらいです。

これはマタイ、マルコの方はヨハネ伝と場合が違うかも知れませんが、こんなことが二、三回あったかも知れません。

「²⁸ペテロ答えて言う『主よ、もし汝ならば我に命じ、水を踏みて、御許に到らしめ給え』²⁹『来れ^{きた}』と言い給えば、ペテロ舟より下り、水の上を歩みて

イエスの許に往く。

という。もうペテロは単純にキリストに信じこんだから、「来い」と言われたら、本当に歩いて行つた。ところが、途中で風を見て恐れて沈みかかったので、叫んで言つた。

³⁰然るに風を見て懼れ、沈みかかりければ叫びて言う『主よ、我を救いたまえ』

と。イエスを見つめていればいいのに、ちよつと目をそらした。「風を見て恐れたれば」と。風なんか見えないんだけど。風がきたので、横をみた。

³¹イエス直ちに御手^{みて}を伸べ、これを捉えて言い給う『ああ信仰うすき者よ、

何ぞ疑うか』（マタイ14・28～31）

と、キリストにやられた。

●ニヒッツ・イスト・アツレス

学校の答案の成績は60点だの80点だのいろいろある。けれども、信仰には——本当は点数はない——0か100点かのどっちかだ。100点満点か0点か。ところが、この0と100は本当は一つなんだ。同じだ。



「信仰なき我を、0を、憐れみたまえ」

と。そうすると、100になる。

「まあだいたい信仰はありますが、もっと信仰を増してください」
なんていうのではない。

ところが、キリストが「信仰うすき者よ」なんて仰るから、厚くならなければいかんと思う。それはキリストの言葉に躓く。自分の精神状態によって信仰が高まつたり、行き詰まつたり、そんな信仰はいつまでたつても当てにならない。そんなものは当てにしない。

「自分の信仰に絶しろ」

ということ。これが「0」、「信仰なき我」なんです。

「信仰なんてものは私にはありません」

と。何かというとすぐ信仰の話をするようなクリスチャンがいるけれども、鼻持ちならない。信仰に絶している。信仰はどこにあるか。キリストにだけある。

「キリストの信は凄いなあ」

と。湖の上を涉ってくるような信だから。これは大変な信です。神さまに信入している。神さまの中に信じ入っている。キリストという信入体なんだ。信入しているところの実存だ。それに見入ればいい。見入る。

「我なり!」

と言うキリストに見入る。見入ったから、ペテロは歩けたんだ。ところが、横を見たからダメになった。キリストに見入る、キリストに信入する――何でもいい、観入でもいい――そうすると、そこは100%なんです。ペテロが歩けた時は100%なんです。横を見た時には、これは破れた。20か30に。これはダメ。

「憐れみ給え!」

と言った時には0になったから、キリストは捕まえてやった。だから、

「二ヒツ・イスト・アツレス」(無は全)

ゼロになると一切となる。

「無即、無限無量」

というのがそのことなんです。無は一切である。だから、信仰なんかない。無者という。何もありません。何者でもありません。徹底的に自己を否定し去っている。そうすると、「第二の我」というものがそこに来ているわけです。天来の我。それに対する自信ならざる自信、誇りならざる誇り、自覚ならざる自覚。何と言おうか言いようがない。非常に矛盾概念ですから。

「無者＝無限無量者」

となる。それを本当に地でやったのがキリストである。我々もキリストの絶対恩寵にあずかって、十字架で無とされたから。十字架で自我というものがなくなつたから。相対的な



我はありますよ。けれども、奥にあるところの十字架を受けとった我というものがある。そこに聖霊がやってくる。何回言ったって同じことだ。

●「汝は我なり」

キリストの、

「我なり」

ということ。我々は人生でいろんなことにでつくわすね。具体的にいろんなことにでつくわしたり、あるいは観念の世界でつくわしたり、いろいろある。その時に、「我思う」ではないんだよ。「我思うゆえに我あり」ではない。

「我信ず、ゆえに我あり」

「キリストに信入する、それゆえに我あり」

と、それだけのなしです。

「怖がるな、私だよ」

と。キリストはもう神の中に入ったから、どんな事態にあっても、本当に自若たるものです。だから、もうひとつの場合では、嵐の湖上の舟の中で寝ていた。即ち、神さまの懷を枕として寝ていた。みんなが、

「沈みそうです！」

と言って、起こした。

「なにを慌てるか！」

と。そして、海を鎮めたというのがあったでしょ。マタイ伝8章23～27節です。

「²³かくて舟に乗り給えば、弟子たちも従う。²⁴視よ、海に大なる暴風^{あらし}おこりて、舟、波に蔽^{おほ}わるるばかりなるに、イエスは眠りい給う。²⁵弟子たち御許^{みもと}にゆき、起こして言う『主よ、救いたまえ、我らは亡ぶ』²⁶彼らに言い給う『なにゆえ臆するか、信仰うすき者よ』すなわち起きて、風と海とを禁め^{いまし}給えば、大なる風となりぬ。²⁷人々あやしみて言う『こは如何^{いか}なる人ぞ、風も海も従うとは』(マタイ8・23～27)

と。大変なことだよな。こんなドラマは、聖書の他にはこういうことは書けない。これはマルコ伝4章とルカ伝8章にも出ている。マルコ伝の方には、

「⁴⁰斯て弟子たちに言い給う『なに故かく臆するか、信仰なきは何ぞ』」

と。

「信仰なきは何ぞ」

と書いてある。ルカ伝には、

「²⁵斯て弟子たちに言い給う『なんじらの信仰いずこに在るか』」

と。



「なんじらの信仰いずこに在るか」と書いてある。

言葉はいろいろ伝えられていますが、どの言葉だつていい。どっちが本当もへったくれもない。どれもみんな本当です。比較研究なんて、

「どれが本当か、どっちがキリストの本当の言葉か」

なんてくだらないことを言っている。いろんな言い方をなさる。我々は普通の会話をするときに、学問的に考えてものを言ってますか。そんなことではないでしょ。本当の学というの、その消息を本当に知らなければ、実は本当の学でもないんだよ。

私たちは、もうどんなことが起きても、

「我なり、懼るな」

というキリストの御言を霊をもつて、霊の耳でもって聴かなくては。そして、キリストの中に入る。もつと凄じい言葉がある。

「汝は我なり」

という。

「汝は我なり、我は汝なり」

と。一人称と二人称が一つになってしまふ。これが本当の一如の世界です。それを執り成すものは、その橋をかけるものは聖霊です。

「百という、無限大という汝は、ゼロなる私となった」

と。あなたが私の中に入ってきた。「汝は我なり」とはそのことですよ。この「我」というのはゼロなんだ。

「ゼロなる我は汝という無限大です」

と。だから、無即無限無量と申し上げている通りなんです。これは信仰の奥義ですよ。十字架と聖霊はそのことです。

「十字架はゼロ、聖霊は無限大」

と。はつきりしているでしょ。ああ、そういうことでしたかと。

「エン・クリスト」(キリストの中に)、

「エン・エモイ」(わがうちに)

ということ。

「キリストはわがうちに、われはキリストのうちに」

という。パウロがしょっちゅう言っているあれです。そういう信仰の神秘なんだ。奥義と言ったって、これは神秘なんだ。この神秘こそが本当の現実です。これが根源現実なんです。空海の即身成仏の世界もこれです。真言宗は非常にヨハネ伝に似ている。真言宗は景教を通してヨハネ的なものを受けとったのではないかと言われるくらいです。

まあ、人生の嵐はたくさんある。人生の嵐に遭っている時に、



「我なり懼るな！」

と。大抵の人はみんな、ああだこうだといろんなことを相談したり、心配したり、易者に聞いてみたり、おみくじ引いてみたり、日がどうだ、方角がどうだと。日も方角もありはしない。東西南北、全部ひつくるめてしまふ。それだけの霊的な気合の世界に入ったら、もう大丈夫ですよ。大安とか何とかいって、大安の日でなければ結婚式をしないとかが言うが、もう本当にそこまで突き抜けないと、大変ですよ、二十世紀のこれからの現実。どういうことになるか、何が起きるか、どんな展開をするか、知らん。その時に本当に役立つのがこの聖書の驚くべき現実を自分の身につけている人です。全く冗談じゃないよ、この聖書なんていうものは。勿体ぶって読むような本ではないですから。取っ組まなくては。

●天を仰ぎて彼自身を擘いた

22 明くる日、海のかなたに立てる群衆は、一艘のほかには船なく、又イエスは弟子たちと共に乗りましたまわず、弟子等のみ出でゆきしを見たり。²³（時にテベリヤより数艘の船、主の謝して人々にパンを食せ給いし処の近くに來る）²⁴ここに群衆はイエスも居給わず、弟子たちも居らぬを見てその船に乗り、イエスを尋ねてカペナウムに往けり。²⁵遂に海の彼方にてイエスに遇いて言う『ラビ、何時ここに來り給いしか』
向こう側に渡ったものだからね。

²⁶イエス答えて言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、汝らが我を尋ぬるは、徴を見し故ならでパンを食いて飽きたる故なり。²⁷朽つる糧のためならで永遠の生命にまで至る糧のために働け。これは人の子の汝らに与えんと為るものなり、

永遠の生命にまで至る糧を——「人の子」というのはキリスト——私が与えようとする。

父なる神は印して彼を証し給いたるに因る』²⁸ここに彼ら言う『われら神の業を行わんには何をなすべきか』²⁹イエス答えて言いたもう『神の業はその遣し給える者を信ずる是れなり』

このヨハネ伝6章は大事なところです。五千人にパンを与えたという大奇蹟において徴を見ていないと言う。何のことですか。パンに飽きて、そのことだけを喜んでいる。

「ああ、素晴らしい奇蹟だなあ」

と言って、パンのことだけを問題にしている。一体、そんなに豊かに食べさせた徴は何か。

「永遠の生命だ。永遠の生命を見ていないじゃないか」と言うんです。

ヨハネ伝は、ある意味において、「永遠の生命の福音書」であると言ってもいいくらいです。死んでも死なない生命。五千人にパンを与えたのは実は、「キリストの体」なんです。パン



はキリストの体が与えられたことになる。パンを食べながら、キリストの体を食べた。永遠の生命を食べたと思うならそれは本のだが、ただパンだけで

「お腹がいっぱいになった、これで助かった」

なんて、そんなもんじゃないんだと。

「天を仰ぎて、パンを擘^さき」

というのは、天を仰ぎて彼自身を擘^さいたことなんです、彼は永遠の生命だから。限らない生命だからね。

何でもそこに祈り込みが大事です。彫刻を作るひとは彫刻を、絵を書く人は絵を、その中に自分の魂を、キリストの生命を、光を、愛を祈り込まなくては。祈り込んだら、これはちがうんです、光が。絵柄が違ってくる。なにか迫力が違ってくる。もうはつきりそうです。技術ではない。神技ということは、そこに神的なことが入っていなければ神技とは言えない。そうでないものは、人技なんだ。人技はいくら巧みでも大したことはない。神技というのはそういうことだ。同じものを作っても、円空あたりが作ったものは神技的なものだね、彼の魂が入っているから。北村青望の彫刻とか。そういう作品を見ていると圧倒されるよ。しばし佇んで動くのがいやになる。

●本願霊証者

キリストは、パンにこもっているところのキリストの生命という徴が見えてないじゃないか、と言うわけだ。永遠の生命の徴が見えてない。まじわざをしたのではないぞと。

「³⁶然れど我にはヨハネの証^{あかし}よりも大なる証あり。

キリストは神さまの本願を霊証^{あかし}しているんです。本願霊証者なんだ。こんな字は初めてだ。これが本証^{あかし}という。キリストは本願の霊証者なんだ。

父の我にあたえて成し遂げしめ給うわざ、即ち我がおこなう業は、自分でやっているのではない。行わしめられている業は、

我につきて父の我を遣し給いたるを証し、

これが本当の徴なんだと。

³⁷また我をおくり給いし父も、我につきて証し給えり。汝らは未だその御声を聞きし事なく、その御形を見し事なし。」（ヨハネ5・36～37）

今の自分の精神状態がどうだ何だかんだと、そんなことはもう問題じゃないですよ。

「我なり、懼るな」

というこのキリストの本証者、その中に自分を投げ入れてごらんさい。俄然、力がくるから。行き詰まった時こそ逆に、本当に力がくる。

そういうキリストです。

「我なり、懼るな」



と。今日はこの一言だけでもいいんですよ、皆さん。

「私だよ、何を恐がるか」

と。「懼るな」というのは、「何を恐がるか」ということなんだ。

「恐がることはないじゃないか、悲観することはないじゃないか、行き詰まることはないじゃないか」

と。キリストの方からいうと今度は。

「私はお前だよ」

というんです、

「お前は私だよ」

と。そういう言葉が上からやってくる。ああそうでしたかと。疲れたと思ったら、もう疲れがどこかへすつ飛んで行っちゃう。風邪を引いていたと思ったら、風邪なんかどこかへすつ飛んで行っちゃう。瞬間にしてそうなります、本当に。それを自分で体験してくださいね。必ず誰でも無条件に体験できるんです。

「まだ聖書の読みが足りないから」

と、そんなことではないですから。

●キリストという神の本証体を信受せよ

ヨハネ伝6章27節に戻ります。

²⁷朽つる糧のためならで永遠の生命にまで至る糧のために働け。

永遠の生命を受けるために働けと。

これは人の子の汝らに与えんと為るものなり、父なる神は印して彼を証し給いたるに因る²⁸ここに彼ら言う『われら神の業を行わんには何をなすべきか』

「働け」と仰るけれども、それでは、私たちはその神の業を行うためにはどうしたらいいんですかと。こここのところの「業」というのは複数なんです。次のところは単数になっている。

²⁹イエス答えて言いたもう『神の業はその遣し給える者を信する是れなり』

この言葉が非常に大事です。

「神の業はその遣し給える者を信する是れなり」

と。神の業は――業でも行でもいいよ――神行というものは実は信仰だというんだ。神行は信仰なりという。

我々が、「キリストを信する」「その遣し給える者を信する」というのは、

「キリストという神の本証体を信受せよ、受けとれ。体受せよ、からだで受けとれ。

信受体受せよ、全存在で受けとれ」

ということですよ。ただ心理的ではない。サイコロジカルな世界ではないんだ。全存在で受けとるものを信仰というんです。全存在で受けとるその受けとりは実は神の業である。神



さまがそうさせている。信ずるということ、神が入ってくる、キリストが入ってくるということは、プラスとマイナスが放電するような世界なんです。全存在を投げ入れるんですから。体受、信受でもいいし、投身、信入、身入でもある。からだを入れる。全存在を投げ入れること。それが神業かみわざなんです。待っているのではないですよ、自分を投げ入れるんです。ぶっ倒れればいい。

「投げ入れることもできません、ぶっ倒れました。そうしたらば、神さまの懷の中にいました」

と、そういう世界です。子供が倒れたと思ったら、もうお母さんに抱き起こされていたという世界です。なにも難しくはない。それをなにか難しいことにしてしまつて、

「まだなかなか信仰というところまでいきません。もつと聖書を読まなくては」

と、なんとかかんとか条件付けている。ひとつも条件はいらない。この世界に入つてキリストの生命の中に入つたら、

「こんな素晴らしいものはない」

と言つて、これを人に伝えざるをえない。これが伝道なんです。ざるをえない。やむにやまれずして行う。

「伝道はやむをえざるなり」

とパウロが言つた。この喜びを、この生命を人に道を伝えざるをえない。この信仰が本当の道だから。

「神の業はその遣し給える者を信ずる是れなり」

と。信ぜしめられる。ざるをえなくなる。「参りました。降参しました」と言う。何と言つてもみんな同じことです。「圧倒されました」と。これがみんな信仰の世界です。それを学者がただ説明ばかりしている。頭で説明したつて何になるかと言いたい。

●「我にきたる者は我これを退けず」

³⁰彼ら言う『さらば我らが見て汝を信ぜんために、何の徴をなすか、何を行
うか。³¹我らの先祖は荒野にてマナを食えり、録して「天よりパンを彼らに
与えて食わしめたり」と云えるが如し』

なんてなことをまた言い出した。またそのパンの話始めた。

³²イエス言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、モーセは天よりのパンを汝ら

に与えしにあらず、

あれは天からのパンではないんだと。

然れど我が父は天よりのパンを与えたもう。

あの「マナ」というのは、ヘブライ語で「マンナー」とは「これは何だ」という意味なんです。それで飢えをしのいだことが書いてあつたでしょ。「一体何だ、これは」というので「マ



ナ」という。けれども、本当のパンはあれではない。モーセのときはまだ本当のパンとは言えない。本当のパンは何かは今、私が言うよと。

³³ 神のパンは天より降りて生命を世に与うるものなり』³⁴ 彼等いう『主よ、そのパンを常に与えよ』

と。また次元の違ったことを言っている。それは結構なパンですねと。

³⁵ イエス言い給う『われは生命のパンなり、我にきたる者は飢えず、我を信ずる者はいつまでも渴くことなからん。³⁶ 然れど汝らは我を見てなお信ぜず、我さきに之を告げたり。³⁷ 父の我に賜うものは皆われに来らん、我にきたる者は、我これを退けず。³⁸ 夫わが天より降りしは我が意をなさん為にあらず、我を遣し給いし者の御意をなさん為なり。

と。キリストはもうはつきり言っている、「遣わした、遣わした」と。自分は神さまに遣わされた使者だと。お使いなんだ。お使いで、神さまにやらされ、神さまに言わせられている。自分自身が生命のパンだと言う。

この次やるところにもつと凄い言葉が書いてある。まあヨハネ伝というのは凄いところだよ。

「私はパンだから、そのパンを五千人に分けてなお余ってしまった。その徴が分からないか。ただお腹がいっぱいになったと言って、喜んでいることではないんだ」

と。奇蹟というただ現象を見てたつてダメだ。その現象の本質は、本体は一体何であるか。キリストを食べたら、キリストというパンを食べたら、もうお昼ご飯はいらなくなりました。午前の集会が終わったら、もうお昼は買いに行くのをやめましたなんていうことになる。まだ一生懸命で買いに行くのはダメなんだ。

本当の人間の生きのよさというものは、このキリストを生きているかということにかかると。キリストを生きていないと、本当の生きのよさは出てこない。魂の世界は、魂から肉体に及ぶところの生命、力というものは、これはキリストからくる。天来のものです。「あなたは80歳ですか。どういう健康法ですか」

「なんにも健康法なんかやっていない。ただ上からくるんだ」と、時々言うものだから。

●霊的同化作用

³⁷ 父の我に賜うものは皆われに来らん、我にきたる者は、我これを退けず。

³⁸ 夫わが天より降りしは我が意をなさん為にあらず、我を遣し給いし者の御意をなさん為なり。

我を遣し給いし者の御意であつて、自分の意はない。自分は奴隷意志なんだと。マルチ



ン・ルターが言っているとおりで。奴隷意志で、私の意志は従うということだけなんだと。ところが、

「この従う奴隷意志こそが本当の自由だ」

と、ルターがエラスムスに向かって言った。エラスムスの「自由意志論」に対して、そうではないと言ったのが、この角度の言葉なんです。

「わが意にあらず、汝の御意を」

と。神さまの御意に従うところには本当の絶対の自由がある。

39 我を遣し給いし者の御意は、すべて我に賜いし者を、我その一つをも失わずして終の日に甦えらする是なり。40 わが父の御意は、すべて子を見て信ずる者の永遠の生命を得る是なり。われ終の日にこれを甦えらすべし』

終りの日に甦るけれども、もう既に地上において甦りの生命をいただいているわけです。「甦り」というのは「黄泉から帰る」という。これは面白い字だね、「更」に「生」きると書く。キリストという栄光体に化せられていくわけです。我々も霊化されていく。霊化という言葉は本当にその意味においては素晴らしい。そういう意味でいわゆる肉体を粗末にはしない。

霊的、同化作用ですからね。「アスミレーション」「同化作用」という。この生命が私たちの中に流れていくと、そういった同化作用が起きる。花を見て、

「花はきれいだなあ」

とみんな思うわけだ。けれども、ただ「きれいだなあ」では困るよ。花を見て、我々の中に花が同化されて、うるわしい心にならなければいかん。うるわしい心にならなければ、本当は花を見ているわけではない。ただ対象として見ているだけのなし。即ち、花と一つになるわけです。

「雲を見れば雲となり、風を見れば風となる」

と、私が言っているのはそのことなんだ。そういう自由無碍な人になる。大宇宙みたいになつていくわけです。

偉大な芸術家というのはそういう非常に繊細なものと、もの凄い強烈なものと全部持っている。だから、ベートーベンの音楽とか、ゲーテの文学というのは素晴らしいことになる。そこで対象とみんな同化作用を起こしている。対象をただ対象としてない。一如の世界にみんな入ってしまう。そうなったら、まあ楽でしょうがないよ、楽しくてしょうがない。なぜそんなにゴタゴタとくだらない議論をしているかと言いたくなる。

ゲーテは大宇宙のコスモスを投影しているミクロコスモスとなったから、彼の文学は限らないものを持っている。いくら研究したって尽きやしない。またいわゆる研究ではつかめやしない。そういう世界です。ダンテだつてそうだよな。ゲーテとダンテという二つの随分違った型の人間だけれども、私はどつちもつかめる。ということは、そういう宇宙的



なキリストの中に入ってしまったから。ゲートもキリストの前には無条件に頭を下げてはいないですか。ダンテだつてももちろんそうです。シェイクスピアも、ドストエフスキーもそうです。ミケランジェロでも、レンブラントでも、とにかくみんな中心はキリストなんですから。

キリストというのは大変なひとなんです。神の現象体は、地上はたった33年ですよ。だからもう、驚嘆して聖書を読みながら、あるときは山の中で読みながら叫びたくなるような世界です。精神的に、肉体的にどんな極限状況になつても絶対に大丈夫ですから。そこを抜け出て、キリストというこの神の根源、現象体に自分を投げ入れたら、もの凄いくことになる。これは本当です。やつてくださいよ。お医者さんも薬もびつくりしてしまう。なるほどこれは本当の薬だと。天下の妙薬はキリストだよ。

だから、永遠の生命たる生命のパンなんです。どのような状態においても、それをこなしていく。そして、どこまでも創造的な人になる。神さまは創造者。キリストも創造していく。このキリストというロゴスが一切のものを造った。今もなお造りつつある。我々自身がキリストと一緒に創造的な人になつて進んでいく。創造したものはどんな人にも限りなく生命を与えていく。伝道なんて言わなくなつて、存在そのものが伝道である。そのようになつていくからね。そういう意味ではやっぱり、無教会の一流の先生方もちよつとなあと言いたくなる。まあしかし、内村先生はとにかく素晴らしい方ですから、内村先生のものはよく読みなさいよ。そして、それは聖霊の光で読むと、先生の言葉以上のものがそこに浮いてくるから。

ヨハネ伝6章は長いんだ、71節まである。しかし、まあよくこういうものが残されたと思う。これは頭で書いた文章ではない。自然に迸っているんです、こういう文章は。本当に神の言葉です。ルターは聖書という霊的な生命の言葉に酔っていた。本当に食らっていた。

そういうことで、今日は、

「神の業は、その遣わし給いしものを体で受けとることはなり」

と。それが本当の信仰であるということ。

「懼るな、我なり」

というキリストで、いつもキリストの

「我は汝なり」

という世界に入ってしまう。そうしたらもう、行き詰まりを知らない人になるから。大丈夫です。そして、自分にこんなことができるかと思うようなことがグングンできてくる。自分の方から制限はいらんですよ。だから、私のような大法螺も吹ける。

「世紀の終りには大詩篇が出るなんて、先生は大きな法螺を吹いている」

なんて。法螺だか何だか知らなくても、必ずやつてみせるから。では、おしまい。

